

【魚津税務署長賞】

「税金に対する心」

富山県立滑川高等学校二年 藤森 柚香

二〇二四年一月一日十六時十分。令和六年能登半島地震が起こった時間だ。私の石川に住む親戚の家も、今はまだ中に入れない状態になっている。多くの人が被害を受け、中には大切な人を失った人もいただろう。私も親戚を含む石川の方々を思うと、胸が痛むことがあった。

ふと、小学生の時に授業で見た税金についてのDVDを思い出した。もしも税金がこの世から無くなってしまったらどうなるのか、という内容だ。そのDVDは、一軒家で火事が起こり、中にいたお母さんも赤ちゃんも助かったが、消火にかかったお金をお母さんが全額負担しなければならなくなったという話だ。消火活動や救急車は、税金があるため無料で利用することができるのだ。私は、税金がなかったら、火事が起こったとしても消防署に助けを求めるのをためらってしまうだろう。消火に時間がかかればかかるだけ、払わないといけないお金が増えていくからだ。私達に何かあった時、真っ先に助けを求められるのは、税金の制度があるからだ。税金は、私達の安全と安心した生活を守っていると言っても過言ではないと思った。

では、そんな税金は実際、能登半島地震の際どのように利用されていたのだろうか。そう疑問に思った私は、岸田首相の会見動画に注目した。その動画を見て、復興基金の財源として五百二十億円を特別交付税によって措置したことが分かった。この金額は、能登6市町は高齢化率が高く、財政力が低いことを考えた上で熊本地震の五百十億円を上回っている。私はこのことを知って、税金はおおよそではなく、しっかりとした根拠を元に使用する金額が決められているのだと分かった。

また、復興基金は自治組織の立ち上げや高齢者世対への見守り対策に向けて使われるだけでなく、地域のコミュニティー施設の再建費用にも使われた。私は石川の親戚の家へ行った時に祭りに参加することが多く、石川は地域の絆が強く、伝統の祭りを大切にしていることを知っていた。そのため、地域の施設のためにも税金が使われたことを知り、税金は人々の思いも大切にできるように活用されているのだと思った。復興基金は、使い道の自由度が高いことが特徴であるため、それに税金を利用することによって、より地域の方々が地域の個性や人々の思いに寄り添って活用できるようになっているのだと思った。

このように、税金はしっかり根拠を元に考えられた金額を、人々が活用しやすいような形で大切に使われていることが分かった。私達が普段、様々な形で納めている税金によって、支えられたり、救われたりする人が多勢いる。そう考えると、私がその税金を納める一員であることはとても光栄なことであると思った。逆に、私が税金によって助けられることもあるだろう。その時に、当たり前なことだとは思わずに、感謝の心を持てる人でありたいとも思った。